

学習者の学びを活性化させるためのいくつかのアプローチ —ありえる楽考式を参考に

関戸 冬彦

Several Approaches for Learners to Be Activated —Referred to the way of “Teams of Thinking about Possibilities for Self-management”

SEKIDO Fuyuhiko

The main purpose of this report is to introduce several approaches to teach English education and literature through the way of “*Arierugakko*” or “Teams of Thinking about Possibilities for Self-management”. This report consists of three parts: 1. explaining the merit and background of teaching English education and literature through the way of “Teams of Thinking about Possibilities for Self-management”, 2. activities and trials in the lessons and 3. responses from learners with an appendix. In this report, effectiveness of the way of “Teams of Thinking about Possibilities for Self-management” will be revealed as the result.

はじめに

近年、アクティブラーニングや協同学習など学び方に対する議論が巻き起こり、それらに関する研究や研修も行われている。これらは簡単に言えば、講義型スタイル、あるいは教員主導型一斉授業、の見直しとなるだろう。本稿はそうした流れの中で、執筆者が担当する獨協大学国際教養学部の学生を主に対象とした開講科目、「専門購読（英語教育特殊研究）」あるいは「英語圏の文学」において、学生の学びを活性化させるために講じたアプローチのいくつかをまとめて紹介、考察するものである。本稿ではまず、活性化させるための機能、もしくはモデル、のひとつとして、ありえる楽考式というものを検証したい。その後、執筆者がこれまでに行ってきたアプローチや具体的な活動例を紹介し、その機能、あるいはモデルとの整合性を考察し、効果や影響について考

える。そして最後に、学生からの反応も紹介し、改善点や今後の可能性についても言及したい。

1 ありえる楽考式とは何か

本稿では学びを深めるための機能、やり方のひとつとしてありえる楽考式というものをベースにしたい。では最初にその、ありえる楽考式とは何か、について述べる。ありえる楽考とは、鈴木利和が考案した、「一人ひとりが「誰の」、「何」に「どう」役立つのか「個人の概念（コンセプト）」を持ち、役立つための要件をモデル化している参加者同士が、「価値創造の型」を共有して、相互の関心を理解した上で、フィードバックしあう個人対象のセルフマネジメント」である¹。具体的な実施方法としては、テレビ電話会議システム、zoomを用いてオンラインの場で週に一度、4人1組（鈴木がファシリテーターとして入るので都合5人）での対話であり、時間としては約60分で行っている。また、スクールタクトというウェブシステムを用い、ここにアップされている「ありえるシート」と呼ばれる専用紙に自らの行動の振り返りを記入し、それを「画面の共有」という機能を併用して、あたかもポスターセッションのように記載されたシートをパソコン画面上に共有し、対話を行う。

この活動を行う根本的な目的としては、鈴木によると、「ひとりひとりが自分の「概念」を形成し、自らによる価値創造を可能にしていく」、ということがある。この 방식을非常に簡単に言い換えるならば、参加者に内省の機会を恒常的に与え、それを自ら口にすることで行動に反映、ひいては変容へと促し、自らが到達したいゴールへと向かわせる機能であると言える。執筆者自身も一参加者として2019年2月より参加し、現在に至っている。

ではなぜこの機能を授業の場にシステムとして取り入れようと思ったのか、具体的活動について言及する前にその部分について若干個人的雑感にはなるが簡潔に触れておく。

鈴木 の存在を知ったのは、2019年1月に西條剛央が開講したエッセンショナルマネジメントスクール²に参加したからである。鈴木はこのスクールにおい

1 ありえる楽考について、そして鈴木の考え方は2019年2月から2019年7月までの鈴木との対話ないし鈴木個人が持つ資料に基づくものである。また、一部は執筆中のものにも含まれる。

2 <https://essential-management.jimdofree.com/>

て、正式役職名ではないものの、先に挙げたzoomやFacebookといった機械的な部分とSNS的交流の場においてディレクター的な役割を果たしており、参加者約150名の調整役といったポジションにいた。執筆者は無論、名もなき一参加者にすぎなかったのだが、Facebookなどでの発言や交流を通して「ありえる楽考」の存在を鈴木から教示され、興味を持った。一度だけ見学（zoomを通して拝聴）をさせてもらったが、見るのと実際にやってみるのとは違うだろうということで、かつ2月中旬のタイミングで新しく4人のチームを結成するというので、それに参加することにした。メンバーとしては割と年齢の近い男女4人組、男性2名、女性2名、だったのでジェンダー的なバランスもよく、スタートしたように記憶している。とはいえ、最初のうちは先のエッセンショナルマネジメントスクールでの授業内容の振り返り、印象などを話していたので、特に何を意識することもなく、週1回のオンライン対話のようなもの思っていた。ちなみに、開催日時は毎週土曜の朝で、最初は寒い中早起きしてパソコンに向かって話をする、というのが何とも不思議に思えた。

しかし、やがて鈴木や他の参加メンバーと話を重ねるうちに、「たまかつ（魂から成し遂げたいと思える活動）」というキーワードがあり、いかにそれに近づくか、またそれを意識して日々を過ごすか、ということがポイントであることがわかってきた。鈴木はスタンスとして「明示的には教えない」という立場を取っているため、彼自身が何かを教えるというよりは参加者が自分で何かに気がつくことを待っている、という部分が多分にある（ということにも一定の時が経た後にわかった）。それゆえ、この機能がどのようなものであるのかに本当の意味で気がついたのは参加し始めてからしばらく経ってからのことであった。その中で、一番自分に影響があったと思える部分を挙げるとすれば、それはやはり内省のチャンスだろう。上記のように、最初はただなんとなく、だったのが日を追うごとに「次回はどんなことを話そうか」、あるいは「この出来事を解決するにはどういうことが出来るだろうか」など、自己との対話、そして週に決まった曜日時間が訪れることで自然とそこに向かって自分自身の気持ちや考えを整理する、ということが習慣となっていった。そのために書籍を読んだこともあれば、例え話として用いるためのエピソード紹介（恥ずかしさを承知で書くならばウルトラマン関連のエピソードなど）をするなど、行動が自動化、そして創造的、にもなっていた。そういう意味では、自分の行動や考えとこの週1回の対話とが密接にリンクし出していったのだろう。換言するならば、生活パターンと思考パターンとが相まってよい相乗効果を生み出した

と言える。

よって本稿ではこうした枠組み、システムの要素をどう大学の授業という場で活かせるのか、あるいはこれまでに執筆者が行ってきた授業内活動とどう類似していたのか、あるいはそうではなかったのか、を中心に考察していく。

2 いくつかのアプローチと具体的活動例

では実際に執筆者が行ってきた授業内活動を振り返りながら、ありえる楽考式や鈴木が提唱しているアプローチとの類似性や通底している考え方、あるいは相違点などを見ていきたい。

2.1 グループ制について

まず始めに、4人1チームのグループ制について、である。先にも述べたように、ありえる楽考では4人でグループを作るのが基本となっているが、これはありえる楽考を知る前から用いていた手法でもある。実際、昨年度に行った「英語圏の文学」では4人1チームで行ってきたことをすでに公表済（関戸、2019）でもある。しかしなぜ4人なのか。昨年度の際には4人それぞれにファシリテーター、タイムキーパー、書記、お助けマンというそれぞれの役を担わせることで積極的な参加を促すことを目的にしていた。ありえる楽考の場合は1時間という時間的な制約がある以上、ひとりの持ち時間が10～15分とすると4人が限界、という側面もあろう。実際の授業においては4人にしておくと2人ずつのペアにも分けられるので、何かと活動の際に勝手がよい。もちろん、絶対に4人でないといけないという厳密なルールは授業内では設定していないし、その日の出席状況によっては3人ないし5人で、といった臨機応変的な対応も取るには取ってきた。が、活動の流れや時間配分、また多すぎず少なすぎず活性化させるためには4人という人数が一番運営しやすいという経験値的な部分もあった。

よってこの点においては奇遇の一致としか言いようがないかもしれないが、逆にいうと4人という数がグループ活動としてのマジックナンバーである可能性は示唆できるであろう。ただし、ありえる楽考式と根本的に異なるのは、グループ内に鈴木的存在、つまりはファシリテーター、が存在していないという部分である。教員、本稿においては執筆者、がその役割を担えればよいのだが、授業全体を管轄している以上、見回りの瞬間参加することは出来ても、常駐することは出来ない。この点がグループとしてうまく機能しなかった際、そこ

からどう対処していけるのか否かの分かれ目でもあるのかもしれない。なお、週1回というタイミングは基本、大学の多くの授業は週1回ペースで行われているので、週1回4人のグループで、というのは必然的に重なる部分ではあった。

2.2 グループ学習としてのActive Book Dialogue

つぎに、これはありえる楽考とは直接関係はないが、鈴木が同様に提唱している活動に、ABD (Active Book Dialogue) がある。これは一冊の本を同時刻に複数の者が分担して読み、その担当箇所をシェアすることで素早く1冊の本の内容が分かるという読書会のスタイルである。鈴木はこれを、先のスクールタクトと連動させたもの、つまり読んだ部分の抜粋あるいは要約やキーワードなどをウェブシステムであるスクールタクト上に記入し、その後参加者全員で共有する、というスタイルを確立し、「タクトル」(Takt-based Collaborative Telling & Readingの頭文字TCTRを取ってタクトルと読む。なお、Taktはスクールタクトの意)と名付けて、実施、推奨している³。実際に取り扱った本の例としては、西條剛央の『チームの力』などがあるが、書籍に限らず論文などでもこの手法は可能である。要は、参加者、大学で言えば授業の出席者全員、が同じ時間に同じようなペースで同じ箇所を読む必要は必ずしもなく、むしろ一人一人それぞれの担当を決め、レポーター形式でリレーのようにつないでいけば本の要旨は全員が共通理解として理解出来る、ということである。

この手法も、執筆者は実は鈴木と知り合う前から行っていた。例えば、「英語圏の文学」でも「専門購読(英語教育特殊研究)」でも、英語、日本語問わず、資料をその場で読んでもらう際に、一斉に配布し、「時間をあげるから少し読んでみて」と言ったところで、全員最初から読んでしまうと最後までたどりつかなくなったり、読むフリをして寝てしまったり、といったことは容易に想像が出来る。しかし、4人で4分割し担当を決め、後でそれぞれが口頭でレポートをする、ということにしておけば、各自の担当箇所に責任感が生まれ、「読まない」という選択肢はなくなる。もちろん、最終的には自分で全部を読

3 タクトルに関してはこのURLが詳しい。

https://peraichi.com/landing_pages/view/tctr?fbclid=IwAR3JiYSQK8GDN11_gH0RynIxEbGwYfk16MpeUe_-IJCb9tk24III1Mt-ap0

んでほしいのが願いではあるが、このようなスタイルで全体像が掴めれば、授業後に読み返す際にも内容を把握しやすいだろう、というねらいもある。これも鈴木氏の「タクト」との差を鮮明にするならば、スクールタクトを使用するか否か、といった技術面での差はある。なお、「タクト」は先にも紹介したテレビ会議システムzoomを併用しており、かつ基本的にオンラインで行う読書会なので、教室内という学習者がリアルに存在する場においては前提条件が異なる。しかし、両者に共通するのは、複数人で複数箇所を同時に読み、シェアすることで共同的に学べる、という点であり、これは有効であると考えている。

さて、ここでスクールタクトについても紹介しておきたい。これは後藤正樹氏が開発したオンライン上の学習システムである。具体的な機能としては、ノートあるいはパワーポイントのように記入が出来、かつクラスとして登録されたメンバーはお互いに記入した内容が読め、相互に「いいね」マークやコメントを記すことが出来る⁴。非常に簡潔にいうと、Facebookのアカデミックバージョンのようなツールである。ただし、使用するにはIDを発行してもらう必要があり、個人で勝手に使用開始が出来るわけではない。あくまで実験的にだが、このツールを2019年度春学期開講科目、「専門購読（英語教育特殊研究）」にて導入してみた。ID発行は鈴木氏に依頼、履修者分のIDを作ってもらい、それらを使用した。履修者は授業中、あるいは授業前、授業後に課題、例えば「よいスピーキング活動とは何か?」「My Lesson Plan」のような問いや項目、に関して各自のアイデアをスクールタクトに記入、お互いに読み合う、あるいは執筆者がプロジェクターを通して全員に示しコメントする、といったことを行った。ねらいは、同様のことを紙に書いてしまうとペアないしグループ内では読めるが、全員が全員のアイデアを読む、ということはなかなか難しく、シェアをクラス全体でしてみたい、という部分にあった。これも効果があったかどうかは後述のアンケートのところでも触れたい。なお、このスクールタクトもありえる楽考同様、知りえたのはエッセショナルマネジメントスクールを通してである。同スクールではあらゆる提出物はこのスクールタクトを通して行われていた。

4 スクールタクトに関してはこちらを参照。<https://schooltakt.com/>

2.3 振り返り／リフレクションについて

ありえる楽考では先にも述べたように、「ありえるシート」と呼ばれる専用紙（Appendix 1）を用いて週の振り返りを行う。執筆者自身が経験してみている感覚にはなるが、これに記入すること、していくこと、で自分の考えが整理され、暫定的ではあるが問題解決の糸口が見えたりもする。鈴木はこのシートを用いることを強く推奨し、諸々の考えを説明出来るともいう。執筆者はこれまで、毎回の授業終了時に科目の如何を問わず、“What did you learn today?”という問いを発し、その日の学びを振り返り、ワークシートに記述式で記入、その後ペアないしグループでシェア、という活動は行ってきた。そういう意味では振り返りに力点を置くという点においては鈴木のと奇遇にも一致していたと言える。また、リフレクションを専門に研究している研究者もおり⁵、学んだことを振り返ることで学びの強化につながる、というのはあながちただの推測というわけでもない。

ただし、ここでも鈴木との差異を考えるならば、「ありえるシート」そのものは恒常的に執筆者の授業では用いなかった。理由は、「ありえるシート」はスクールタクト上で展開されており、あらゆる授業にスクールタクトを実験的とは言え導入するのは難しいと判断したからであった。もちろん、同じものをプリントアウトして紙媒体で記入、も出来たかもしれないが、管理などがやや煩雑になると、提出してしまうと自分の手元に残らない、つまりは書きっぱなしになってしまうのではないかと懸念したからである。

そんな中、唯一これを試したのは先にも複数回言及した「専門購読（英語教育特殊研究）」であった。2019年度春学期最後の授業の際、学期全体の振り返りとして「ありえるシート」を使ってもらった。使い方はこちらで簡単に説明し、授業前の状態、学期を通して学んだこと、気がついたこと（現在の状態）、そして学期後（今後）どんなことをするか、したいか、をシートの流れに沿って図式的に記入してみよう、とした。学生の多くはスマートフォンからのアクセスで、これまでにスクールタクトを使っていた際に「若干使いにくい」との声もあったのでどうなるだろうかと心配な部分もあったのだが、使い始めてから10～15分で大抵の学生は理解を示し、その日出席していた18名全員が記入を完了した。その後、2人一組になってもらい、お互いのシートを見せ合いながら口頭で振り返りやこれまでの学びをシェアするという活動を行った。この

5 例えば、東北福祉大学教育学部の上條晴夫など。

活動自体に関する詳細なアンケートを実施したわけではないので質的、量的共に確かなことは言えず、あくまで執筆者の主観的観察に過ぎないのだが、この「ありえるシート」を使った振り返り活動そのものに嫌悪感を示す者は当日の教室内では見られなかった。むしろ、真剣に取り組む雰囲気すら感じられたくらいであった。なお、スクールタクトの使用そのものに関する反応は先にも述べた通り後に記す。

3 学生からの反応

ではこうした取り組み、アプローチを学生たちはどう感じていたのだろうか。その反応を探るべく、2019年度春学期「専門購読」最終授業の際にアンケート(Appendix 2)を実施した。出席者18名、回答者数も同様に18であった。以下に、その結果と考察を記す。質問は5項目で、主に授業形態(特に参加型)についての意見を聞いた。

まず、「一斉授業型(講義形式)ではない参加型授業はあなたにとって良かったと思いますか?」では、「大変そう思う」が16名、「そう思う」が2名、次に「参加型授業は学びを効果的にする機会になったと思いますか?」では「大変そう思う」が15名、「そう思う」が3名であった。これから察するに、一斉講義型ではなく参加型であることは大いに支持されている。自由回答記述もいくつか紹介すると、参加型に関しては「参加型の方が自分の意見をきちんと考える必要があるので、きたえられると思う」「自分でやっている」という実感があり、時間があつというまでした。「授業を終えた後に、何かを学んだという感覚をもてる」などの意見があり、効果的かどうかについては「自分を表現することが1番学びにつながる、ペアになると人がいるから頑張れる」「必ず自分で思考し、まとめることをしていたので、効果的にできると思う」「いろんな意見が聞けて楽しかった」など、総じてより学びに対して積極的な姿勢であったこと、他者との対話が刺激になったこと、がうかがえる。

3つ目の質問、「グループワークはうまくできました感じますか? できた/できなかった理由も記入してください。」では「よくできた」が10名、「できた」が7名、「どちらとも言えない」が1名で、主なコメントとしては「みんな違った意見を持っていてすごく楽しかった」「話をききつつ、その話の内容に合わせて自分の意見が言えたり応答できたりした」などで、先の参加型とその効果と同じく、自分の意見の主張と他者とのやりとりに充実感を覚えたといった趣旨のものが多かった。

続く4つ目の質問、「授業以外でも科目のことやグループのことを考えましたか?」に関しては上記3つとは異なり、回答がばらけた。「よく考えた」が3名、「考えた」が9名、「どちらとも言えない」が3名、「あまり考えなかった」が2名、「全く考えなかった」が1名となった。肯定的な意見としては、「ライティングの授業で資料を参考文献に使用した」、あるいは「次の授業では何をするか」とか考えてました」というのがあり、他の授業との関連性や次回への期待などがあったようだ。逆に否定的なものとしては「就活でとてもそれどころではなかった」といったものがあったが、これはやや特殊なケースであろう。

最後の質問、「振り返りやレポートを書くことで学びは深まったと思いますか?」では「大変そう思う」が9名、「そう思う」が9名で、「授業の中で振り返りすることによって頭の中で前回やった内容を思い出すことができたので学びは深まった」というコメントに代表されるように、授業後のアウトプットに積極的な意義を見出しているものがほぼ全員だったと言える。

また、スクールタクトに関しては「その他、コメントがあれば自由記入をお願いします。スクールタクトについても何かあれば。」で自由記述のみ回答してもらった。いくつか取り上げると、「行っている作業がリアルタイムで反映されているのはすごいと思いました」「授業外でも意見交換につかえるので非常に便利」といった機能面での評価があった。逆に「少し操作がむずかしいです」「スマホだと若干やりづらい」といった指摘もあった。授業にノートPCやタブレットを持ち込む学生があまりおらず、ほとんどの学生がスマートフォンからの入力であったことを考えるとそれは頷けるかもしれない。執筆者はPCからの入力しかしていないが、授業内でのスマホ操作を見るにつけ、やりにくさ加減は推測できたのでそこはどのデバイスを用いるか含め、今後の課題だろう。

なお、ほぼ同様の質問を「英語圏の文学」でも行ってみた。こちらは出席者51名、回答者数51と母集団が大きく、また対象も国際教養学部だけに限らず全学部、全学年に跨っていたので回答の幅は「専門購読」よりも大きくなった⁶。

6 「専門購読（英語教育特殊研究）」には数名他学部の学生もいたが、ほとんどは国際教養学部の学生たちで、前年度までに執筆者の授業に出ていたものや、それを通してお互いによく知っているものが多かったので、雰囲気として学生同士も、執筆者に対しても、良好な関係を築きやすかったという前提条件はあった。

両授業のアプローチの差としては、「専門購読」では完全なグループ制はとってはいなかったが、「英語圏の文学」では人数も多いのでチーム制とし、座席も活動もほぼ毎回同じグループで行った。また、「英語圏の文学」ではスクールタクトは使用しなかった。そうしたことも踏まえての結果が以下である。

「一斉授業型（講義形式）ではない参加型授業はあなたにとって良かったと思いますか？」では「大変そう思う」が25名、「そう思う」が23名、「どちらとも言えない」2名、「そう思わない」1名、続く「参加型授業は学びを効果的にする機会になったと思いますか？」については「大変そう思う」25名、「そう思う」24名、「どちらとも言えない」2名、3つめの「グループワークはうまくできたと感じますか？できた／できなかった理由も記入してください。」では「よくできた」17名、「できた」26名、「どちらとも言えない」5名、「あまりできなかった」3名、4つめである「授業以外でも科目のことやグループのことを考えましたか？」は「よく考えた」6名、「考えた」27名、「どちらとも言えない」9名、「あまり考えなかった」8名、「全く考えなかった」1名、とこの質問については「専門購読」同様、意見が分かれた。最後の「振り返りやレポートを書くことで学びは深まったと思いますか？」は「大変そう思う」24名、「そう思う」23名、「どちらとも言えない」4名と評価は高かった。

これらのアンケート結果から言えることは、本稿の2で紹介したグループ制、Active Book Dialogue (ABD)、振り返り、総じて授業形態としての参加型、に対しては肯定的な見方が多く、またそれが効果的であると意識している学生が多い。また、グループワークもうまくいけば楽しさを感じたり、相互の刺激になったりとよい側面があると思われる。こうしたことが授業外の時間にも波及するかどうかに関しては個人差、あるいは状況よりの違いもあるが、概ねよい効果として受け取られることのほうが多かったと言える。そして、振り返りをすることで学びは深まり、次の学びへ、あるいは興味、関心へ、と駆り立てるきっかけのようなものになったと言えるだろう。つまりこれらの肯定的意見は本稿で分析した、ありえる楽考式、具体的項目を繰り返すならば、グループ制、ABD、振り返り、を大学の授業に取り入れた場合、学びを促進する効果があると判断できる要素であると言える。

とはいえ、これらのアプローチに関して課題がないわけではない。例えば、先のアンケートからの自由記述に書かれていたものを少し取り上げると、「学生同士で読み合うのはよいが、相手側がしっかり読んでくれないと誤差が生まれる。何回か経験してもどかしかった。」との意見もあり、ABDのように読む

担当を決めて行くと当然、その本人の力量が問われるわけで、いくら責任があると言っても実力によっては担いきれないこともあることは予見できる。これを回避するためには、同じセクションを読んだもの同士が一度集まって内容を確認し、それからグループでシェアするなどのステップを踏めばそうしたことは回避できるだろう。また、グループワークに関しては「効果的な発問の回数が少なかった」という意見もあり、グループ内での活動が滞った場合、どの程度介入していくか、あるいは鈴木的なファシリテーターをつけるのかどうか、もしくはそうした役割を持ち回りで付与させておくのか、は今後考えてみたいポイントでもある。

おわりに

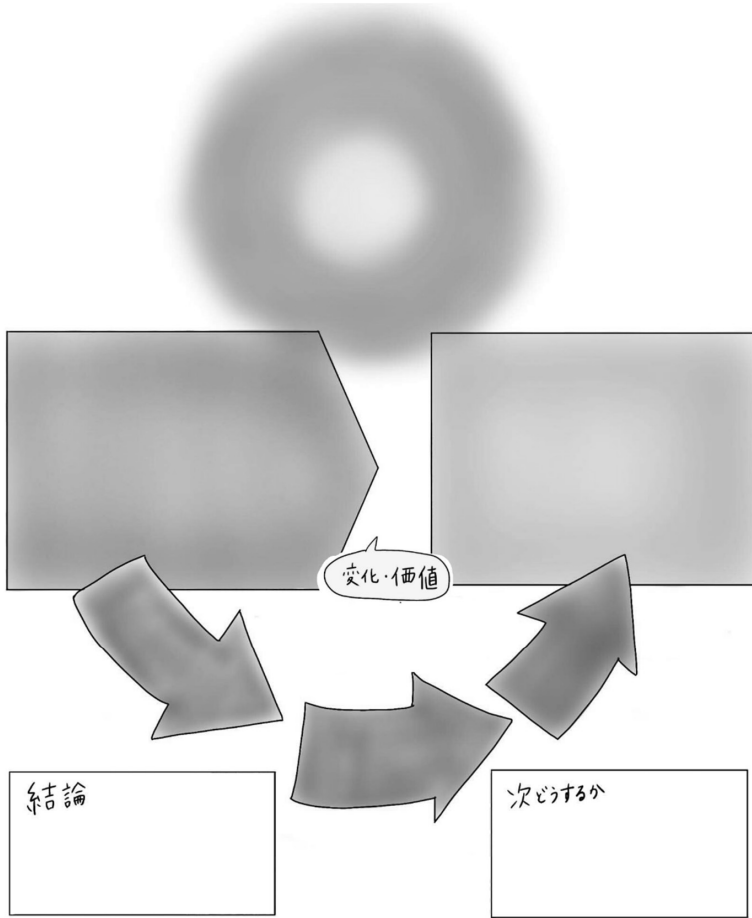
本稿ではこれまで述べてきたように、学習者の学びを活性化させるための機能、またはモデルとしての、ありえる楽考式について検討してきた。まず、ありえる楽考とは何かを考察し、その骨子の部分を明らかにした。つぎに、これまで執筆者が行ってきたもの、またありえる楽考と共通、通底する部分について活動や実践例を具体的授業の中から紹介し、学びの促進に関する議論を行った。そして、アンケートを通しての学生からの反応を検証することでその効果、ありえる楽考式と執筆者の活動のよい部分を明らかにした。加えて、今後克服していくべき課題などについても言及した。

学びの手法はひとつではないし、絶対的な正解もない。しかし、なるべく多くの学生に積極的な学びを促すために何が出来るのか、は常に考え続けていきたい。そのためにも本稿で検討した、ありえる楽考式、はひとつのヒントであり、効果的な機能であると思えるので、今後も継続的に実践し、また報告していきたい。

参考文献

- 鈴木利和 (2019) 「セルフマネジメントを目指したコーチング手法の考察—ありえる楽考の取り組み (仮)」(執筆中)
- 関戸冬彦 (2019) 「主体的で対話的で深い学びを促す文学講義科目—「英語圏の文学」授業実践報告」『マテシス・ウニヴェルサリス』第20巻第2号, 163-179.

Appendix 1 ありえるシート



Appendix 2 授業アンケート

専門購読 授業運営 アンケート

無記名でアンケートにご協力お願いいたします。当てはまるものに○をつけてください。枠内には答えの理由を記入してください。成績等には一切関係しません。また、この結果は英語教育の論文に掲載されることがありますので、ご了承ください。

1. 一斉授業型（講義形式）ではない参加型授業はあなたにとって良かったと思いますか？
1 大変そう思う 2 そう思う 3 どちらとも言えない 4 そう思わない 5 全く思わない

2. 参加型授業は学びを効果的にする機会になったと思いますか？
1 大変そう思う 2 そう思う 3 どちらとも言えない 4 そう思わない 5 全く思わない

3. グループワークはうまくできたと感じますか？できた／できなかった理由も記入してください。
1 よくできた 2 できた 3 どちらとも言えない 4 あまりできなかった 5 全くできなかった

4. 授業以外でも科目のことやグループのことを考えましたか？
1 よく考えた 2 考えた 3 どちらとも言えない 4 あまり考えなかった 5 全く考えなかった

5. 振り返りやレポートを書くことで学びは深まったと思いますか？
1 大変そう思う 2 そう思う 3 どちらとも言えない 4 そう思わない 5 全く思わない

6. その他、コメントがあれば自由記入をお願いします。スクールタクトについても何かあれば。

なお、この授業を履修した理由は
内容（英語教育）に興味があった・たまたま時間が空いていた・単位が必要だった・その他（ ）

